『曉の寺』の小説構造可視化
——三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き——

谷　口　敏　夫

1　はじめに

三島由紀夫の長編『豊饒の海』は、『春の雪』『奔馬』と続き、本論で扱う『曉の寺』はその三巻目となる。本論は、過去と同じくその作品構造をKT2システムを用いて可視化するものである。

すでに『春の雪』は「雅」、『奔馬』は「武」の定評がある。『曉の寺』は新潮社の文庫本解説では「〈悲恋〉と〈自刃〉に立ち会った本多繁邦は、タイで日本人の生れ変りだと訴える幼い姫に出会う。壮麗な猥雑の世界に生の源泉を探る。」*1となっており、「猥雑」という言葉があう。しかし以下本文で詳細するが、「猥雑」を透徹したまなざしで見つめるというところがある。見つめ究めたところに、主人公本多の「認識」が浮かび上がってくる。よって、本作品を端的に記すならば「認識」の書であると言っておく。

これは小説の方法からも言える。読後感のイメージから『春の雪』での視点は松枝清顕（まつえだきよあき）、『奔馬』では飯沼勲（いいぬまいさお）であると言っても齟齬は生じない。しかし『曉の寺』は四部作での転生からみるならば、主視点はタイ国のジン・ジャン姫であってもよかろうに、これは本多繁邦その人以外考えられない。たとえ提題助詞「は」のつく登場人物が慶子や槇子、ジン・ジャンであれ、だれであったとしても、圧倒的な頻度（1088回）を持つ本多繁邦の「本多は」（548回）が作品の主視点を構成している。すなわち、本作品は本多繁邦の目でみた世界で

＊1　http://shinchosha.co.jp/cgi-bin/webfind3.cfm?ISBN=105023-6（2003/09/02採取）

あり、それは観察者としての本多が、老成した認識者に転化する作品であった。

2　実験・調査の目的と方法

過去の実験事例*2に合わせて、本論の目的と方法に変化はない。要約すれば、長編小説の全体構造を登場人物、および読み解く鍵語によって可視化し、把握することである。このことから、小説の構造や流れが理解でき、作品のより深い鑑賞を可能とする。方法は、従前使ってきたKT2システム*3での文章内位置付き用語抽出を基本にし、等高線グラフ*4で文章地図をつくり、クラスター分析*5を行った。

調査に使った『暁の寺』は新潮社文庫によった。実質総頁数368で、全45章、二部構成である。四百字原稿用紙換算では712枚（368頁×18行×43字）。第一部は１～22章でタイとインドが舞台。第二部は23～45章で東京と御殿場の富士山が見える別荘が舞台となる。全四巻の『豊饒の海』で二部構成は『暁の寺』だけである。つまり、この作品は明確に前半と後半とが別の構成を持つ。

3　文章地図

表１に、KT2システムで作品から抽出した用語のうち、頻度数20以上のもの107例をあげた。『春の雪』では頻度数20以上が105例、『奔馬』では137例あった。

用例は人名が上位を占めるが、一般語に近い「家」「日本」も目立つ。特徴

＊２　谷口敏夫『春の雪』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、39（2001/12）
http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2001/Misima2001/Misima2001.html
谷口敏夫『奔馬』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、40（2002/12）
http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2002/Misima2002/Misima2002.html
＊３　谷口敏夫「KT2の世界」http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/20/KTCoder/KTCoder.html
＊４　マイクロソフト社のエクセルによる
＊5　システムは「Let'sStat!Pro」。http://member.nifty.ne.jp/QZM01222/LetsStat/lsIndex.html

的なのは第一部の舞台となったベナレス、バンコックの地名がある。また第二部の主調である猥雑さには「肉体」「快楽」「乳房」とあり、これらは男女の性的関係に使われている。この傾向については後節にゆだねる。

表1　用語の頻度

1067	本多	61	存在	39	清顕	27	東京	23	別荘
257	自分	61	花	38	部屋	27	種子	23	仏教
256	ジン・ジャン	60	夢	38	思い出	27	事実	23	芝生
197	慶子	58	二人	38	子供	27	孔雀	22	未来
171	彼	57	椿原夫人	38	月光姫	27	バンコック	22	年齢
140	梨枝	56	若	38	夏	26	蓼科	22	心地
121	死	55	プール	37	名	26	輪廻	22	汗
120	私	53	彼女	36	不安	26	滝	21	恋
114	顔	53	タイ	36	認識	26	自然	21	輪廻転生
107	女	50	夫人	35	匂い	26	快楽	21	本質
104	今西	50	言葉	35	時間	26	ホテル	21	青空
103	世界	50	感情	34	肉体	25	人生	21	少女
93	菱川	49	女官	34	瞬間	25	巨大	21	寺院
93	光	48	記憶	33	微笑	24	姫様	21	気配
92	家	47	指環	32	意味	24	乳房	21	印度
75	槇子	47	妻	32	ベナレス	24	殿下	21	アメリカ
73	日本	46	本当	31	気持	24	転生	20	日本人
73	火	46	青年	30	寺	24	書斎	20	中央
70	克己	44	椅子	29	一度	24	褐色	20	自由
68	勲	44	阿頼耶識	28	時代	24	インド		
67	金	40	富士	28	幻	23	薔薇		
63	人間	39	良人	27	必要	23	眠		

3.1　用語の分類

表1には不要語も多数あるので、全体の傾向をつかむために107用例を10のクラスに分類しそれを表2とした。この分類は上位語を種子にし帰納的に行った。これは経験則に従うヒューリスティックスであり、過去の2巻で行った方法と同じである。ただし、今回は「春の雪鍵語」と「奔馬鍵語」とを「豊饒海鍵語」としてまとめ、また本作品自体については「暁寺鍵語」を上位として、「暁・快楽」、「暁・象徴」の二つのクラスを設けた。特に「暁・象徴」につい

ては、読みを深めるたびに、「女官」や「椅子」という言葉に私が拘泥しはじめたからである。しかし本論では分析にまでは至らなかった。

表２　『暁の寺』用語の分類

15件	人物	11件	豊饒の海鍵語	12件	暁の寺鍵語	10件	暁・快楽	11件	暁・象徴
1067	本多	61	存在	53	タイ	34	肉体	49	女官
256	ジン・ジャン	60	夢	40	富士	26	快楽	44	椅子
197	慶子	47	指環	32	ベナレス	24	乳房	38	子供
140	梨枝	44	阿頼耶識	30	寺	21	アメリカ	38	部屋
104	今西	36	認識	27	バンコック	55	プール	25	巨大
93	菱川	27	種子	27	東京	26	ホテル	24	褐色
75	槇子	26	滝	25	人生	23	芝生	24	書斎
70	克己	26	輪廻	24	インド	23	別荘	22	未来
68	勲	24	転生	23	仏教	27	孔雀	21	青空
57	椿原夫人	21	輪廻転生	23	眠	23	薔薇	20	自由
39	清顕	21	恋	21	印度	282	←小計	20	日本人
38	月光姫	393	←小計	21	寺院			325	←小計
26	蓼科			346	←小計				
24	殿下								
24	姫様								
2278	←小計								
15件	**三島鍵語**	**12件**	**抽象語**	**7件**	**一般語**	**7件**	**その他**	**7件**	**不要語**
121	死	103	世界	114	顔	257	自分	46	本当
107	女	92	家	63	人間	171	彼	29	一度
93	光	73	日本	58	二人	120	私	27	事実
73	火	50	言葉	56	若	53	彼女	27	必要
67	金	36	不安	50	感情	50	夫人	26	自然
61	花	35	時間	31	気持	47	妻	22	心地
48	記憶	34	瞬間	22	年齢	39	良人	21	気配
46	青年	33	微笑	394	←小計	737	←小計	198	←小計
38	夏	32	意味						
38	思い出	28	時代						
37	名	21	本質						
35	匂い	20	中央						
28	幻	557	←小計						
22	汗								
21	少女								
835	←小計								

頻度20以上の用語、107件、6345頻度

○人物

「本多」以下15件挙げたが、後述する名寄せを必要とする。本巻から主人公は本多繁邦になった。これは主人公という属性のとらえ方にもよるが、この第三巻まできて、次巻『天人五衰』を知るならば、『豊饒の海』全巻の主人公は本多繁邦であったと仮定してもよい。本論冒頭で言ったが小説の視点は本多に移った。今となっては、松枝清顕も飯沼勲も戦後の日本では、はるか実在も定かならぬ幻じみたものに近づき、唯一本多の証言によってのみ、各時代の若者がその実在を保証される、という遠いところに来てしまっている。

ジン・ジャン（月光姫）は『春の雪』で同一名が使われている。清顕→勲→ジン・ジャンという転生者想定の女性が本巻で生きる。本巻でのジン・ジャンの父親が、昔の恋人（『春の雪』で登場）と同じ名前を娘に付けたことになっている。また月光姫という和名とジン・ジャンというタイでの名との区別は本文を詳細に読む以外は判定できなかった。強いて言えば第一部では月光姫が多用され、第二部では幼い頃の姫を「月光姫」とし、「女」としての姫をジン・ジャンと使い分けている傾向もある。しかしながら、本論での目的からはずれるので分析は割愛した。

「殿下」は前半部で多用され、区別をしなかったので、分析には入れない。「姫様」は第一部での月光姫を指す事例が多いが、分析からは外した。

○豊饒海鍵語

「存在」以下11件挙げた。これには前２巻の鍵語の大部分を含め新たに、｛存在、認識、種子｝を加え、春の雪鍵語からの｛唯識、黒子、夢日記｝をはぶいた。また奔馬鍵語からは｛夢｝をのぞきすべてはぶいた。この件については、最終巻および全巻をまとめる際に、あらたに鍵語をたてる予定である。要するに、『暁の寺』は前２巻とは異なる視点、本多繁邦が主人公になる世界であって、前２巻の幽玄夢幻とは異なる世界であるからである。唯一象徴的に「滝」は含めたが、『暁の寺』での「アジャンタの滝」は、別途考える必要がある。よって、分析には「豊饒の海鍵語」として一括して扱った。

なお、以下の鍵語群も一括処理をした。

○暁の寺鍵語

「タイ」以下12件を挙げた。そのうち｛タイ、富士、ベナレス、バンコック、東京、インド、印度｝の半数強７件までが地名など場所をあらわす用語である。地名や国名は本多が経巡る土地そのものだが、その場所で本多は各種の心的体験をする。そう言う意味で、この「暁の寺鍵語」は本多の認識内容と合致し、それぞれの言葉が本多自身を指すと考えてもよい。図２で後述するが、本多と「暁の寺鍵語」「暁・象徴」「豊饒の海鍵語」の３群は本多と共時的なパターンを共有する。他に「三島鍵語」とも一致するが分析は割愛する。

○暁・快楽

「肉体」以下10件を挙げた。ここには性的猥雑さを代表する｛肉体、快楽、乳房、孔雀｝と、物質的快楽を代表する｛アメリカ、プール、ホテル、芝生、別荘｝とに大別される。薔薇は極めて象徴的な用例で独立する。しかしこの鍵語群も一括扱いをした。先述の本多との共時性は少ない。

○暁・象徴

「女官」以下11件を挙げた。遠くから見れば異同が確かにあるのだが、目を合わせ見つめると逃げるような、非常に曖昧な用語群である。たとえば「子供」という一般語も「要するに、世間的には、彼は*6「すべてを持っていた」のだ、ただ一つ子供を除いて。」という箇所では、本多がこの世で望むべくもない物質的豊かさと、社会的待遇を受けてはいるが、それらは何人（なんびと）にも継承されないという強い象徴性を持つ。この鍵語集団も一括扱いとした。

○その他

他の「三島鍵語」以降は、すでに二つの論文で述べたので割愛した。

●用語の傾向

表２を円グラフにしたのが図１である。これは高頻度用語107件での分類である。人物が37%に対し、『暁の寺』固有の鍵語は14%｛暁寺鍵語、暁・快楽、

---

*6　谷口注：彼とは本多をさす。

暁・象徴｝となる。これは『奔馬』での人物35%、固有の鍵語11%｛奔馬鍵語、裁判｝[*7]と近似である。よって用語の傾向としては、三島由紀夫の場合一貫していると考えて良い。

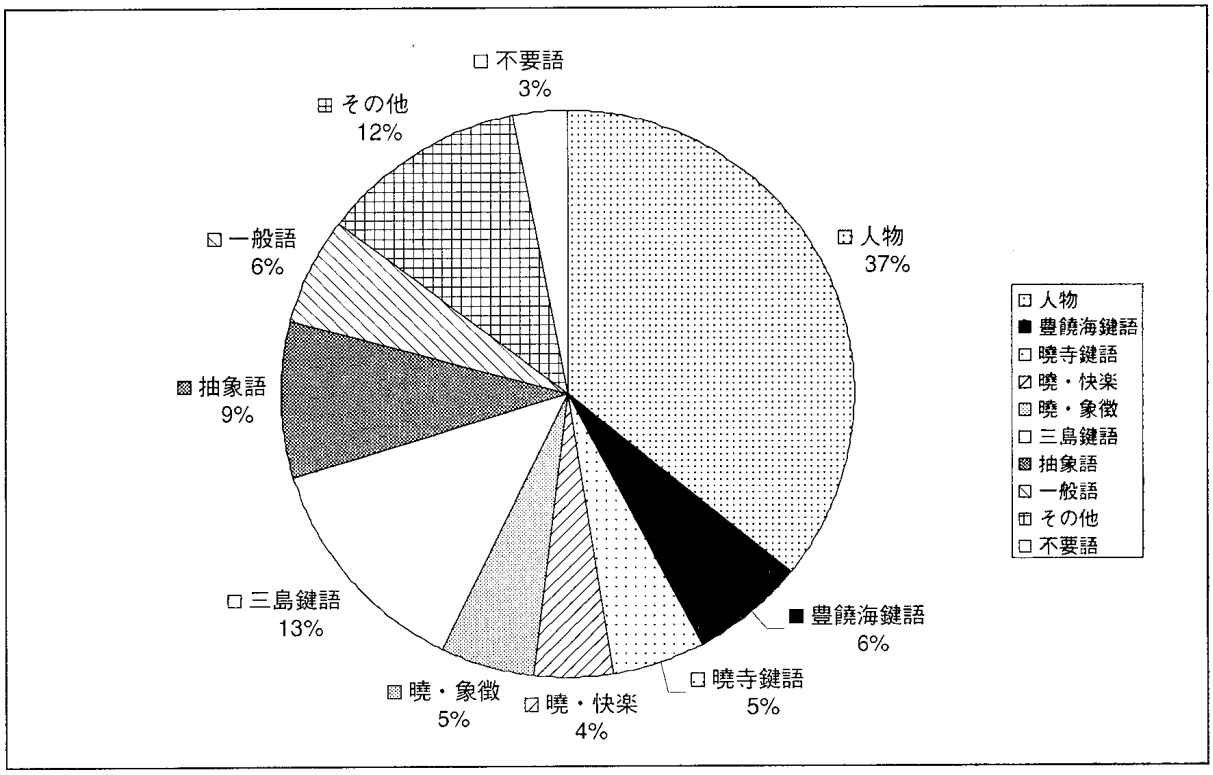

図1　『暁の寺』用語の傾向

◎用語の地図

図2では表2で分類された用語および用語群を地図化した。このうち◎でマークされているのは鍵語を一括して扱ったものである。

注目すべきは第一部での本多の二つの山（1章～、8章～）である。これに照応して◎の鍵語群は「暁・快楽」を除いてほぼパターンが一致している。第一部は快楽以外の『暁の寺』固有の世界観、つまり『豊饒の海』全体を支配する輪廻転生、唯識論に関する表明であることが判然としている。

＊7　谷口敏夫『奔馬』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、40（2002/12）
http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2002/Misima2002/Misima2002.html

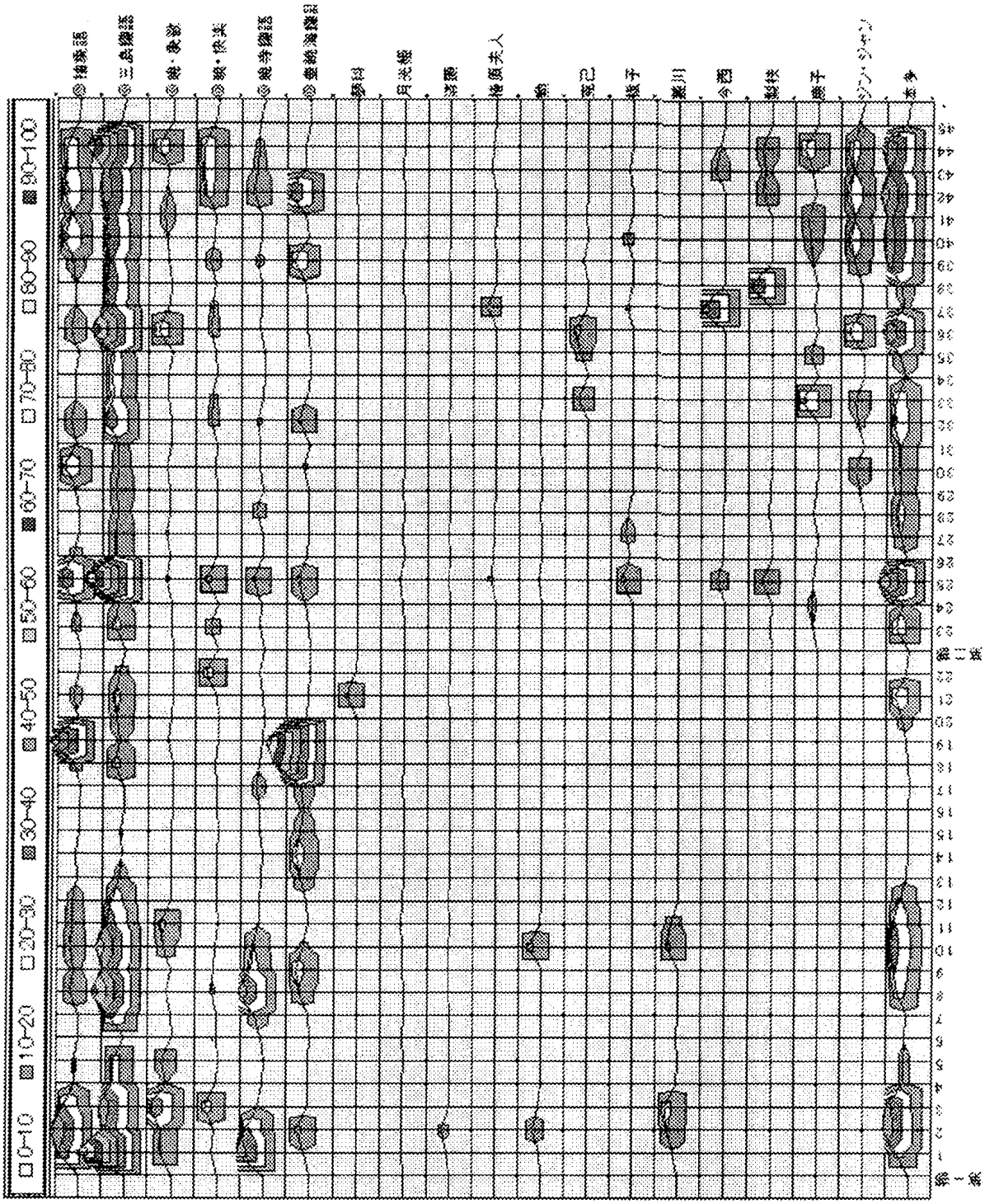

図２『曉の寺』分類用語地図

3.2　人物の認定

上位頻出語のうち37%を占める人物について、さらに分析し人物を確定する。これは「名寄せ」作業でもある。名寄せの詳細を表３に記した。人物の認定に

関する内容は、『春の雪』『奔馬』のものを流用し加筆訂正した。

○本多　繁邦（ほんだ　しげくに）

『春の雪』の主人公松枝清顕の友人であり、『奔馬』ではその主人公飯沼勲の弁護人となる。清顕の転生を観察する者として、全巻の主人公と考えて良い。松枝清顕が三島由紀夫の雅や美に対する一つの見識の結果と考えるなら、飯沼勲は三島の武に対する見識の結果となる。両者は現実世界でともに矯激であり、

表3　『曉の寺』名寄せ表

1067	本多	140	梨枝	68	勲
10	本多先生			2	飯沼勲
3	本多夫婦	104	今西	70	勲小計
1	万一本多	1	今西証券		
1	本多弁護事務所	1	今西康	57	椿原夫人
1	本多家	106	今西小計	2	椿原
1	晩本多			59	椿原小計
1	前夜本多	93	菱川		
1	実際本多	2	菱川君	39	清顕
1	瞬間本多	1	菱川憎	4	松枝清顕
1	今朝本多	96	菱川小計	2	清顕の夢日記
1088	本多小計			1	松枝清顕君
		75	槇子	46	清顕小計
256	ジン・ジャン	4	鬼頭槇子		
38	月光姫	79	槇子小計	26	蓼科
294	ジンジャン小計				
197	慶子	70	克己		
1	久松慶子	1	志村克己		
2	久松	1	克己的		
200	慶子小計	72	克己小計		

夭折する。そうして『暁の寺』では転生者と考えられるジン・ジャン（月光姫）の影は薄く、月光の透明度はやがて性的狂乱に落ちていく。むしろ第一部のインド、ベナレスでそれまでの世界観を崩壊させた本多が主人公になる。彼は、公園で、別荘で人の情事を覗き見し、やがて透徹した認識者になる。しかしそれはまだ過程であり、本多の世界認識の完成は『天人五衰』を待たねばならない。

○ジン・ジャン（月光姫）

ジン・ジャンに松枝清顕、飯沼勲の転生の証となる三星の黒子は、５度の記述の上で漸くあった。それは44章まで待たねばならなかった。最終章の１つ前である。

ジン・ジャンの腋はあらわになった。左の乳首よりさらに左方、今まで腕に隠されていたところに、夕映えの残光を含んで暮れかかる空のような褐色の肌に、昴を思わせる三つのきわめて小さな黒子が歴々とあらわれていた。

……本多はおのれの目を矢で射貫かれたような衝撃を受けた。

頭をずらして、書棚から身を引こうとした。

そのとき背を軽く叩かれたのである。

別荘書斎の覗き穴から若いジン・ジャンの裸身を盗み見る本多の肩を叩いたのは妻の梨枝だった。

かつて『春の雪』ではシャムから留学しているパッタナディッド殿下の、恋人としてジン・ジャン（月光姫）が本国にいた。しかし死別した。パッタナディッド殿下は末娘にその昔の恋人の名をつけたわけである。その娘が現在戦後の日本に留学し、本多と再会していた。

○久松　慶子（ひさまつ　けいこ）

『暁の寺』第二部で初出だが存在感がある。認識者本多の現実行動での指南役である。慶子は第二部冒頭でくっきりと描写されている。

久松慶子は堂々たる婦人だった。

五十歳に垂んとしていたけれども、整形美容をしたという噂のあるその顔に、些かはりつめすぎ光沢のよすぎる若さを持していた。吉田茂にもマッカーサー元帥にもぞんざいな口をきける、まことに例外的な日本人で、とっくの昔に離婚していた。このところ彼女の情人は、富士の裾野のキャンプに勤務するアメリカ占領軍の若い将校であった～（後略）

○本多　梨枝（ほんだ　りえ）本多繁邦の妻。

○今西　康（いまにし　やすし）

鬼頭槇子の女弟子椿原の情人。本多からは、男性として酷評された存在である。椿原とともに焼死する。

今西康はドイツ文学者で、四十そこそこで、戦争中は青春独乙派を紹介し、戦後はいろんな文章を書き散らし、性の千年王国を夢みていた。

○菱川（ひしかわ）

五井物産のタイでの法的係争の弁護人として派遣された本多を、現地で案内する芸術家くずれのインテリ。今西と同じく、本多から酷評される。

さらに厄介なのは贋物の芸術家で、えもいわれぬ昂然としたところが、独特の卑屈さと入りまじっていて、怠け者特有の臭気があった。単に人にぶら下って生きている男の怠惰を、菱川はいかにも熱帯風な、豪奢な貴族的な怠惰に装っていた。レストランでメニューを選ぶときも、「どうせ五井物産が払うのだから」と前置きをして、必ずシャトオ物の高価な葡萄酒をとる菱川の遣口が、本多の気に障った。本多はそれほど葡萄酒が好きではないのである。

○鬼頭　槇子（きとう　まきこ）

『奔馬』では軍人歌人鬼頭中将の娘として登場する。離婚歴のある三十代半ばの歌人。勲らの蹶起を事前に飯沼茂之（勲の父）に漏らす。勲とは姉弟の間柄だったが、やがて明確な恋人となった。そして勲の裁判では偽証する。『暁の寺』では女流歌人として大成している。御殿場の別荘で、本多は書斎の覗き穴から槇子の弟子椿原とインテリ今西の情事を見る。そして、そこに二人の痴態を見つめる槇子のまなざしも見た。「本多はふたたび槇子を見た。槇子はその白銀に光る白髪をたゆたわせ、自若として見下ろしていた。性こそちがえ、槇子が自分と全く同じ人種に属するのを本多は覚った。」

○志村　克己（しむら　かつみ）

慶子の甥。33章初出。以下の引用で語り尽くされる青年で、清顕や勲とは対極の世界に住む。総じて、本多は全ての男を酷評する。19歳で恋死した清顕や、19歳で自刃した勲の記憶からみれば、全ての男は本多の評価の対象にならない。本多は慶子にジン・ジャンの男友達紹介を依頼した。

「わかるわ。あの娘が処女であっては、あなたにすべて具合がわるいわけね。今度私の仕様のない甥を連れて来て差上げましょう。この子なら、あとくされのあることなんか何もないのよ。あとであなたは、ゆっくりあの娘のやさしい、親切すぎる、慰め手の役をなさって、お楽しみになれるわけだから。……すばらしい計画ね」

○飯沼　勲（いいぬま　いさお）第二巻『奔馬』主人公

○椿原（つばきばら）夫人

歌人鬼頭槇子の弟子。25章初出。

むかしの財閥の椿原夫人は、五十がらみの槇子と同年輩でありながら、槇子を神のように敬って侍(かしず)いていた。

～

この*8かたわらに置くと、椿原夫人の悲しみはいかにも生に見えた。これはいかにも無残な対比で、精錬され仮面になった芸術的な悲しみがいわゆる名歌を次々と生むのに、弟子のいつまでも癒えぬ生の悲しみのほうは、歌の素材にとどまって、たえて人の心を打つ歌を生まなかった。歌人としての椿原夫人の多少の名は、槇子の後見がなかったら、忽ちにして失われたろう。

○松枝　清顕（まつがえ　きよあき）　第一巻『春の雪』主人公。

○蓼科（たでしな）

『春の雪』では実行行為の介添え者として登場する。宮家に嫁ぐことの決まった綾倉聡子と、松枝清顕の逢瀬を手引きした。『暁の寺』では、わずかに21章での、松枝家焼け跡での本多との再会場面でしか登場しない。そこで綾倉聡子の近況を本多に話し、彼から「生卵」を手渡されて礼に、「大金色孔雀明王経」を本多に差し出す。この孔雀明王は終盤でジン・ジャンの性的象徴となる。

●登場人物地図

図３に人物のまとめとして、『暁の寺』登場人物地図を挙げた。これは図２とは異なり名寄せの正規化をほどこしたものである。この図３から分明なことがいくつかある。

全体を俯瞰してみるなら、この作品は第一部と第二部とが対称的になってい

---

*8　鬼頭槇子と比べると。

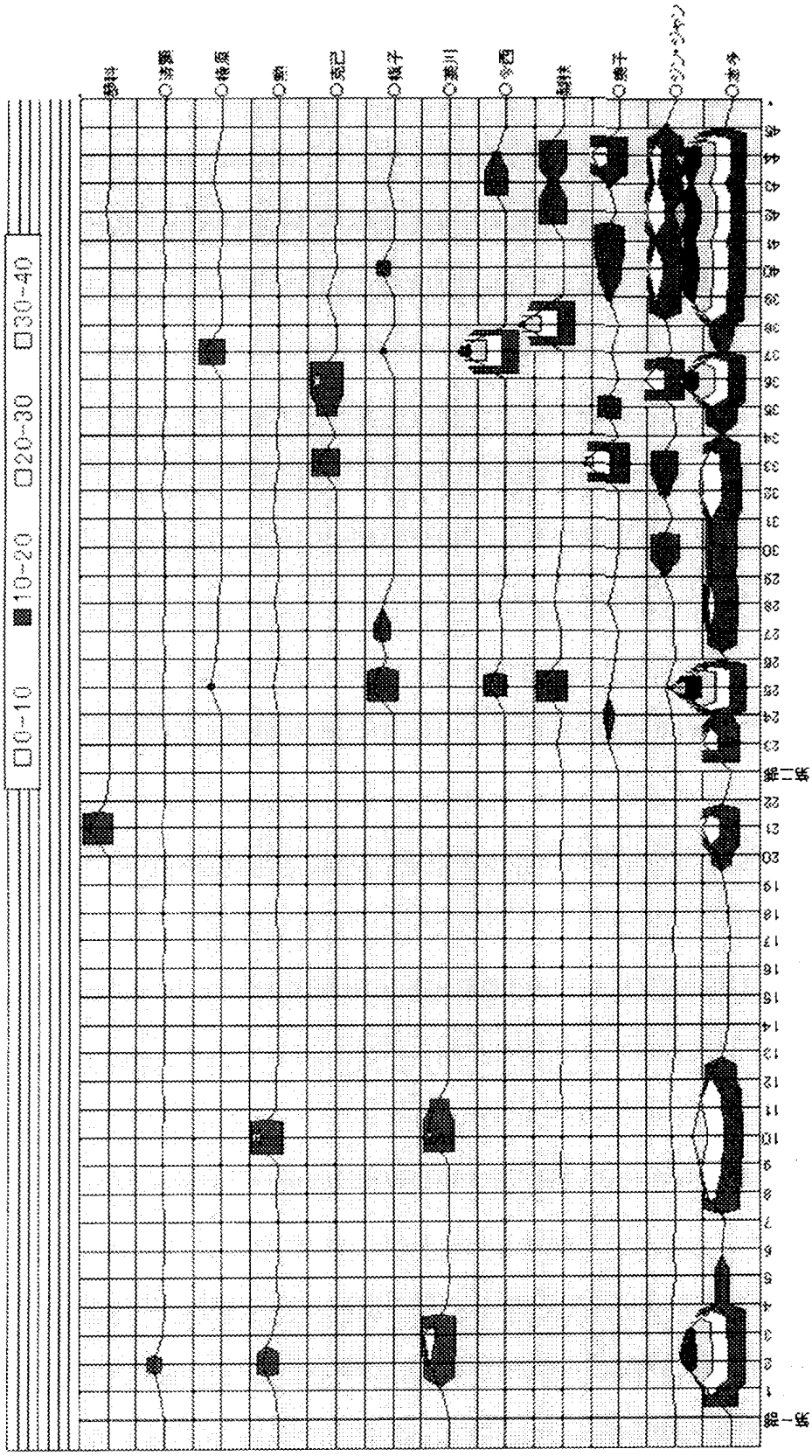

図３　『曉の寺』登場人物地図（名寄せ済み）

るのが分かる。調査した12人に対して第一部には５名の人物配置しかみることができない。実際にはジン・ジャンも７歳の気の触れた姫君として登場はしているが、頻度の上では図３の左部にみるように、人物が空白の海に点在しているのがわかる。このことから、『暁の寺』は二つの別種の小説にさえ見える。これは第一部が人物描写よりも空白に代表される、本多の世界認識の過程に集中したからであろう。第一部は観察者にして輪廻転生の証言者、本多繁邦の一人称小説と言ってもよい。

第二部には人々の関係の彩が綴られている。これはジン・ジャンの裸身にある転生の証、三星の黒子を老いた本多が発見する過程である。すなわち性の狂乱、猥雑さの中で、覗きという手続きを経て本多はジン・ジャンを観察した。しかも、昭和28年本多が58歳の44章でジン・ジャンに転生者を見た本多は、その夜別荘を焼失した。最終章では帰国したジン・ジャンが、翌年二十歳の春にコブラに咬まれて死亡した事実を、昭和42年に聞き、あっけない結末を迎える。

通時的な流れの中では、かつて飯沼勲の恋人だった鬼頭槇子のパターンが目を引く。25章で槇子に再会した本多の多様な言及が、44章というクライマックス部分では、跡形もなく消え去っている。槇子は今西と弟子椿原との情事を凝視し、それを本多が覗き見するだけのために登場したのか。

図を縦にみる共時的視点から、本多を軸にして５カ所の特異な共時性をみた。２章｛本多、菱川、勲、清顕｝、10章｛本多、菱川、勲｝、21章｛本多、蓼科｝、25章｛本多、梨枝、今西、槇子、椿原｝、44章｛本多、ジン・ジャン、慶子、梨枝、今西、椿原（低頻度）｝

25章は、本多の御殿場別荘に槇子や椿原が招かれた章である。44章は最終章の45章をエピローグとするなら、実質的終章である。別荘焼失と今西、椿原の焼死が描かれた章であり、これは一種のカタストロフィーである。以下では、２章、10章、21章の特異な人物共時性を分析する。

（１）本多と飯沼勲

２章｛本多、菱川、勲、清顕｝と10章｛本多、菱川、勲｝は同種の共起であ

る。芸術家くずれのガイド菱川は本多によって徹底的に俗物として扱われる。その際本多の脳裏にあるのは、恋死した清顕であり、自刃した勲であった。『豊饒の海』が、最初の二巻で物語の極致にまで上り詰めた世界を描き、そこで清顕と勲は強固な連関を持った輪廻転生者として描かれていた。しかし、本多が第三巻第一部ベナレスでの観察者から、世界認識者の第一歩を踏み出す過程に入ったとき、転生者と見なされるジン・ジャン姫は女臭い女に成熟し、コブラに咬まれて死ぬという、現実世界の中に堕ちていく。

この２章と10章の共起は、共通のものがある。菱川は絵に描いたような、抽象性さえもった俗物としてあり、第二部のインテリ今西に近似である。一方で清顕や勲は昭和15年の本多にとってどう写っていたのか。本多は勲を軸にして語ることに重い。２章に例をとる。

もし生きようと思えば、勲のように純潔を固執してはならなかった。あらゆる退路を自ら絶ち、すべてを拒否してはならなかった。

勲の死ほど、純粋な日本とは何だろうという省察を、本多に強いたものはなかった。すべてを拒否すること、現実の日本や日本人をすらすべて拒絶し否定することのほかに、このもっとも生きにくい生き方のほかに、とどのつまりは誰かを殺して自刃することのほかに、真に「日本」と共に生きる道はないのではなかろうか？誰もが怖れてそれを言わないが、勲が身を以て、これを証明したのではなかろうか？

～

本多はここの暑熱の中では、それを思い泛べるだけでも額に清水を滴らすような感じのする、日本の神社のたたずまいを心に泛べた。石段をのぼって近づく参詣者の目には、ゆくての拝殿を囲む明確な枠組としか見えない鳥居が、参詣をすませて帰る者の目には、青空だけを湛えた額縁と見えるのだ。一つのものがおごそかな神殿と何もない青空とを、表と裏のように全的に包含するあのふしぎ。あの鳥居の形式こそ、勲の魂だったように思われる。

少くとも勲は、最上の、美しい、簡素な、鳥居のような明確な枠を生きた。そこでその枠の中に、不可避的に、青空が湛えられてしまったのだ。

～

本多はアジャンタで最期の滝を見たと思い定めた。そこで何者ともわからぬ人の気配を感じた。ベナレスの露天火葬の劫火の中に白牛が本多を見つめているのに気づいた。それはもう一つの、輪廻の世界かもしれなかった。しかし本

多は汚濁と清浄のベナレスで世界の果てを味わい、強烈な自我崩壊を起こした。インドで考え、インドで出会ったかもしれない清顕や勲という一直線の輪廻転生もまた、ベナレスの狂乱と静謐のまえに、ぐにゃりと溶けていく読後感があった。すなわち、もしかしたら、第四巻『天人五衰』の予兆は第三巻第一部で顕われていたのかもしれない。

（2）本多と蓼科

第一部21章は、本多が帰国してから数年後、日本は敗戦の年であった。明治期にはかつて14万坪あった松枝家はこのとき千坪ほどになっていた。

門前に立ってみると、千坪ほどの地所は大そう手狭に見えた。多くの家作が地所を区切っているからである。邸趾の泉水や築山が、かつての広大な池や紅葉山の貧相な模型のようである。裏手には石塀がなくて、木塀は焼け落ちているから、南平台方面へつらなる隣地の広い焼趾が視野の裡にある。思うに、そここそ、かつてのひろびろとした池を埋立てた趾であった。

池には中ノ島もあり、紅葉山の滝もそこに注ぎ、本多は清顕と共にボートを漕いで島へ渡り、そこから水色の着物を着た聡子の姿を認めたのだった。清顕はみずみずしい青年であり、本多も自ら思い描くよりはよほど青年らしい青年だった。そこで何かがはじまり、何かが終った。しかも何らの痕跡をとどめていないのである。

本多はこの地で95歳になった蓼科に出会った。綾倉家と聡子の消息を聞き、本多は入手しずらい生卵を蓼科に与えた。蓼科は、本多に「大金色孔雀明王経」を返礼とした。

この共起は丁度作品の中央部に位置する。ここで日本は破れ、明治大正昭和初期と続いた、ある一貫したなにものかを喪失した。そうして、19歳の記憶によって松枝家をくまなく思い出せる本多は、眼前に焼け跡だけを見た。敗戦とともに、清顕も勲も、役割をほぼ終了したと、私は考えた。本多の輪廻転生の想念の中に二人は点描されてはいくが、作品全体はこの後夢幻を離れ、ひたすら現実の世界を進んでいく。それは本多繁邦の老醜の世界であった。世界認識者への過程の中で、三巻第二部以降は四巻の終末直前まで、あたかもベナレスの汚濁部分をかき分けていく様相を呈した。

(3) 空白共起

過去に『春の雪』『奔馬』では、人物がほとんど登場しない空白の共起現象に関していくつか論考した。この『暁の寺』では第一部に大きな空白がある。そこには熱帯のタイ、小乗仏教、暁の寺（ワット・アルン）、仏教哲学、唯識論、ヒンズー教、ベナレスの露天火葬、アジャンタの滝など、『豊饒の海』の背骨となる輪廻転生にかかわる本多の独白がある。第一部全体を見回しても登場人物は、幼いジン・ジャンと、ガイドの菱川、タイやインドのきらきらしい仏教精神との対比としての飯沼勲、その数名である。

ここには、空白によって小説構造が変異をとげるのではなくて、本多一人がひたすらインド、ベナレスに圧倒されている。そのことによる空白共起である。

4　クラスター分析

クラスター分析の適用はすでに『春の雪』『奔馬』で述べた。ここでは『暁の寺』について同じ分析を試みた。以下分析の対象とした人物及び鍵語は、それぞれ「3.1用語の分類」、「3.2人物の認定」で得たものを、勘案し選定した。人物としては名寄せした表3から｛本多、ジン・ジャン、慶子、梨枝、今西、槇子、椿原、勲、清顕、蓼科｝の十名を選んだ。

鍵語としては表2から｛豊饒の海鍵語、暁の寺鍵語、暁・快楽、暁・象徴｝の4鍵語群を選んだ。

4.1　人物と鍵語のクラスター分析

図4は、主要登場人物と鍵語の関係をクラスター分析し樹図（デンドログラム）を描いたものである。手法はユークリッド距離およびウオード法によった。これまでの論究とは異なり、ここでは鍵語を群としてあつかい、個々の要素への重み付けは行わなかった。ここで図4を解釈してみる。

○本多・クラスター

主人公本多が意味のあるクラスターを構成していないことに注目した。これ

はすなわち本多の高頻度が、特に第一部では関与する人物が少なく、空白共起となるような独白に終始したこと。第二部では、すべての人物に関して本多の視点で描かれたに等しい小説構造を持っていること。全ての人物は本多によって観察され、本多の眼前で右往左往した事実によってもたらされた現象である。極端に言えば、本多は物語の中には生きていなかった、作者三島由紀夫がそこに居た、とさえ私には思えた。

○曉・快楽・クラスター

第二部でのジン・ジャンは芳醇な肉体の女臭さを持っていた。しかし19歳の女性をどうみるかは、この場合は、多少風変わりなジン・ジャン自身の自己認識よりも、本多という男の目でみた姿であるとするのが正当な評価である。ジン・ジャンを評価するのは本人よりも本多の視点によってである。そこに｛ジン・ジャン、曉・快楽｝というクラスターが生まれた。それをまとめきった慶子は、ジン・ジャンと同性愛にふけることによって、それを本多が覗き見することによって、快楽の極致が表現された。そしてまた、その時本多はやっとはじめて、五度目の機会をもって、ジン・ジャンの腋に三星黒子を見たのである。｛慶子、｛ジン・ジャン、曉・快楽｝｝というクラスターは、「快楽」という本作品の主調概念群を形作っている。

○槇子・クラスター

｛｛槇子、椿原｝、今西｝と、あえて今西の順逆を変えた。これは読後感からである。50代になった槇子の女流歌人としての名声は高かった。19年前飯沼勲の弁護に、彼を助けるために偽証までした底知れぬ女。

> しかし口に出さぬ深いところでは、本多は槇子を怖れ、槇子もおそらく本多を怖れていた。ともするとこれが、自分の名を守るために、槇子が本多と旧交を温ためた最大の理由だったかもしれない。少くとも本多は槇子の本質を知り、土壇場になればどんな嘘でも、それも用意周到な嘘を吐くことのできる女だと知っていたからである。(25章)

その女弟子、資産家の血を引くが才能の全くない椿原夫人。そして椿原と関係をもつドイツ文学者今西。このクラスターの実態は、鬼頭槇子によって形作られている明確な概念群である。この群の特徴は、以下の引用にある。

本多は突然、事柄の厳粛さと忌わしさに気づいて唇を噛んだ。今や明らかになったことがある。槇子が命じたかどうかは別として、槇子の見ている前で、(おそらく槇子の目の前でだけ)、夫人がこうしてあからさまな行いをしたのは、今夜がはじめてではないのである。いや、これこそは、槇子と夫人との師弟の間柄の、献身と侮蔑の本質であったかもしれない。(27章末尾)

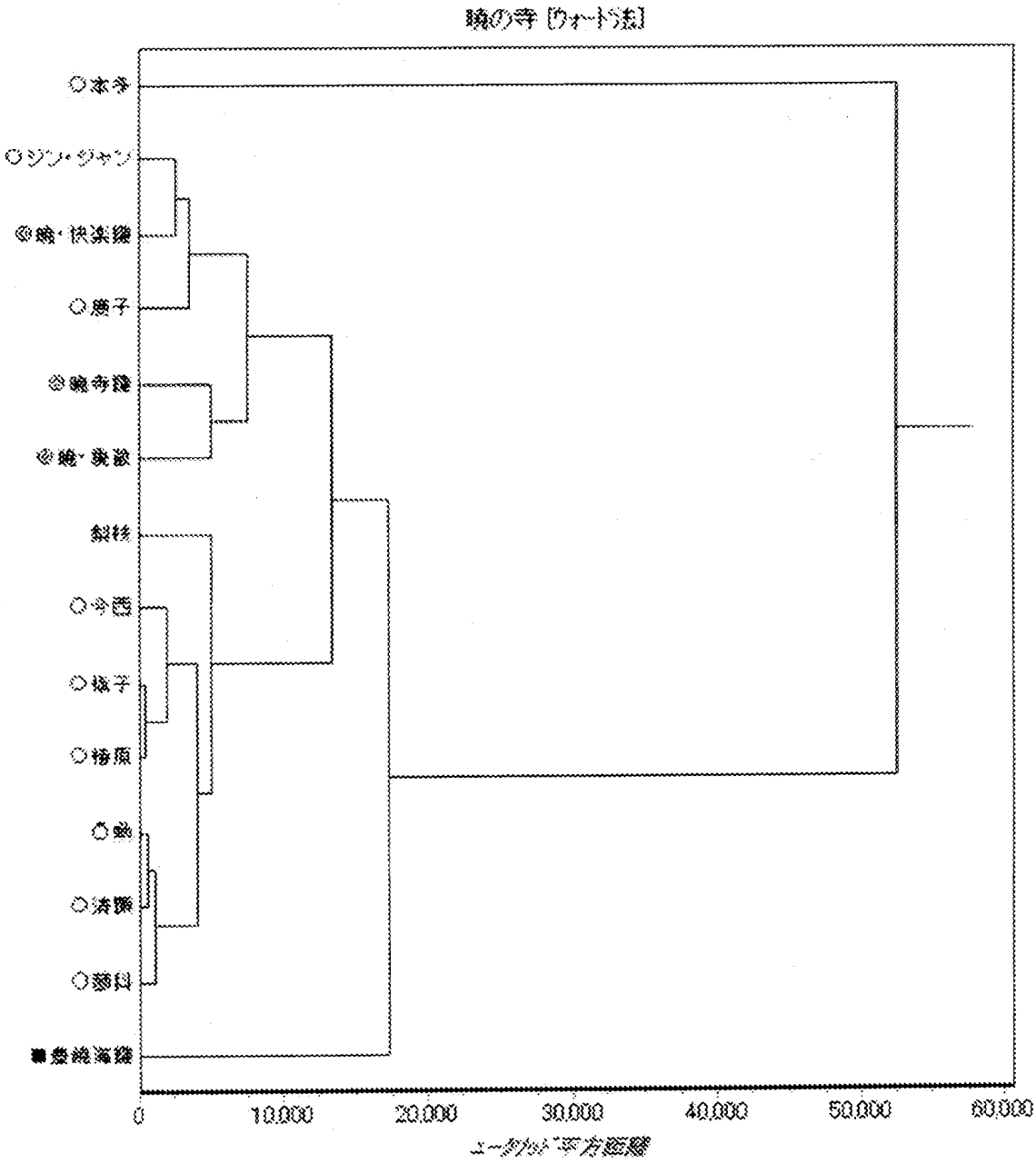

図4　登場人物と鍵語群[*9]

＊9　○は名寄せ人物、◎は『曉の寺』固有の鍵語群、■は『豊饒の海』のうち三巻分から選んだ鍵語群

本多は50代になって、凝視する鬼頭槇子に同質性を知ったのである。

○清顕・クラスター

{蓼科、{勲、清顕}} が明確なクラスターを形成したのは、これまで読み継いできた者には明白すぎることである。かつて松枝清顕がいた。清顕が死にいたる原因となった綾倉聡子との悲恋は、蓼科によって手引きされた。飯沼勲は『豊饒の海』という物語世界では、清顕の破綻無き転生者である。蓼科を焼け跡の松枝家領地で見た本多が、清顕を想起したのは自明であった。このように本多の想起によって現れるこのクラスターは、夢幻のクラスターと名付けるのが妥当である。

以上ここでは4つのクラスターを認め、次節に続ける。

4.2 『暁の寺』概念地図

これまでの記述で、『暁の寺』から登場人物、鍵語を選定し個別に解釈を加えた。ここでは、クラスター分析の結果を地図に応用した。すなわち用語のY軸配置をクラスター間の類縁によって、正規化した。この結果を図5に地図化した。

●地図の解釈

まず全体としてみてみると、第一部には人間がいない。本多の認識の経過がある。第二部は人でむせかえっている。だから『暁の寺』は二つの異なった作品とも見える。{タイ {バンコック}、インド {ベナレス、アジャンタ}} と認識。{日本、{東京、御殿場}} と快楽。もちろん、第一部があったから、第二部の狂乱、快楽が尖鋭になった。対称構造、シンメトリーの妙味から、くっきりとした小説構造とも言える。以下に地図に見える特徴的なパターンを解説する。

○豊饒の海鍵語群（19章）

この鍵語群は、間隔をおいて2章、9章、19章という風に、漸増傾向が明確である。19章の冒頭を引用する。

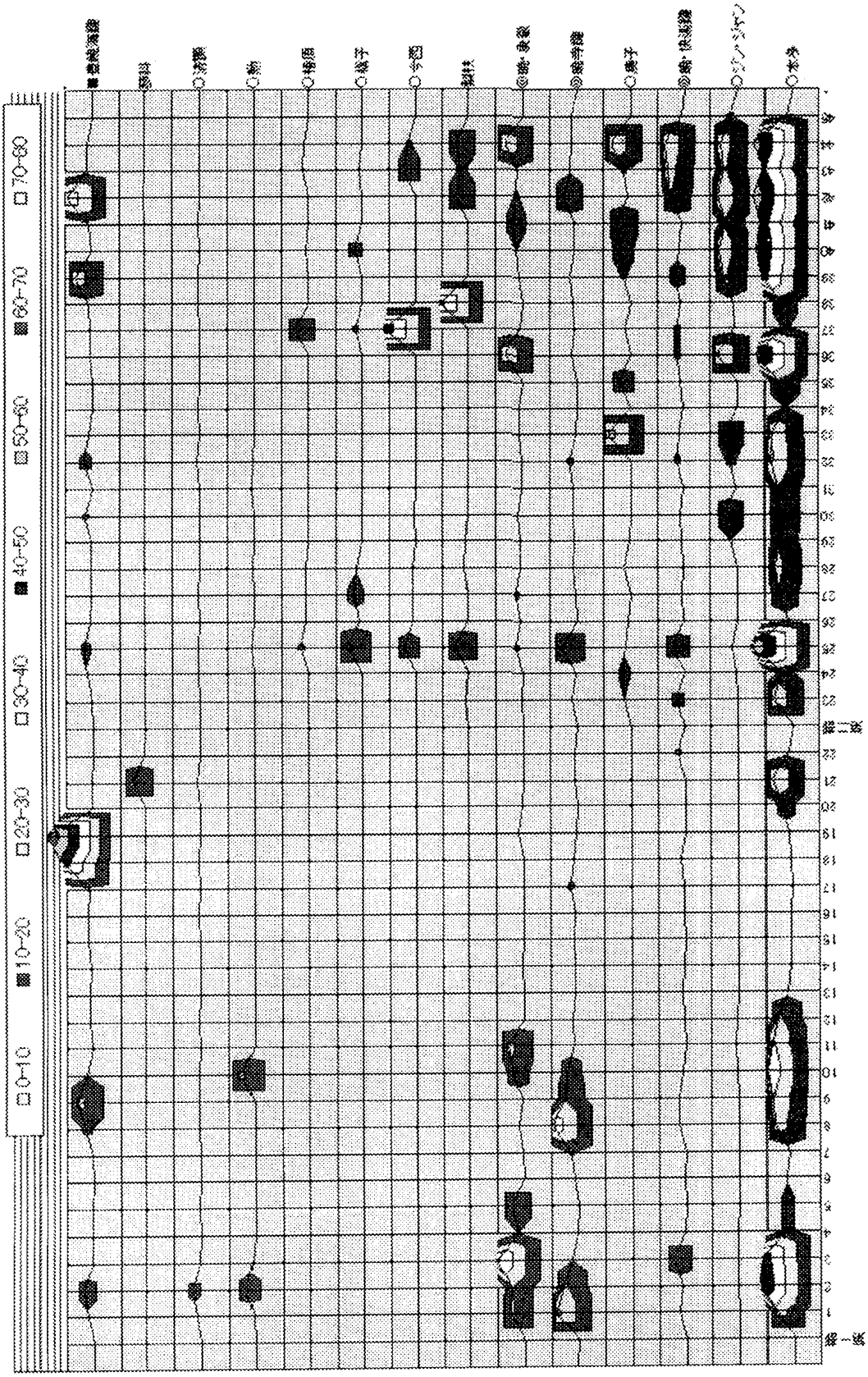

図５　『暁の寺』 人物と鍵語

……しかし本多は、唯識論について学べば学ぶほど、阿頼耶識がいかにして世界を顕現させるかという態様に、興味を抱かずにはいられなかった。なぜなら唯識論は、阿頼耶識による因果は「同時」に、すなわち一刹那に、しかも更互に起ると説くからである。かりにも因と果を時間的継起によってしか考えられない本多には、この阿頼耶識と染汚法の同時更互因果という観念ほど、難解なものはなかった。しかも、これが唯識および大乗全般と、小乗とを分つところの、根本的な世界解釈の相違をあらわしていることは明らかだった。

唯識論、阿頼耶識について読者が学ぶことを必須とは思わない。『豊饒の海』は松枝清顕から飯沼勲への転生を完全に描き出し、それはまじりけなしの物語であった。三巻第一部ではその物語の骨格を本多が認識したわけである。第二部から最終巻『天人五衰』の大尾直前までの1.5巻分は、現実世界という猥雑で混乱した、夾雑物の表現であったと考える。

私という一人の趣味からいうなら、『暁の寺』第一部終了とともに、『天人五衰』の最終部に直截リンクしてもよかったと味わう。しかし趣味と、普遍的小説の結構とは異なる。異なったとしても、仏教哲学の一部である唯識論が必須

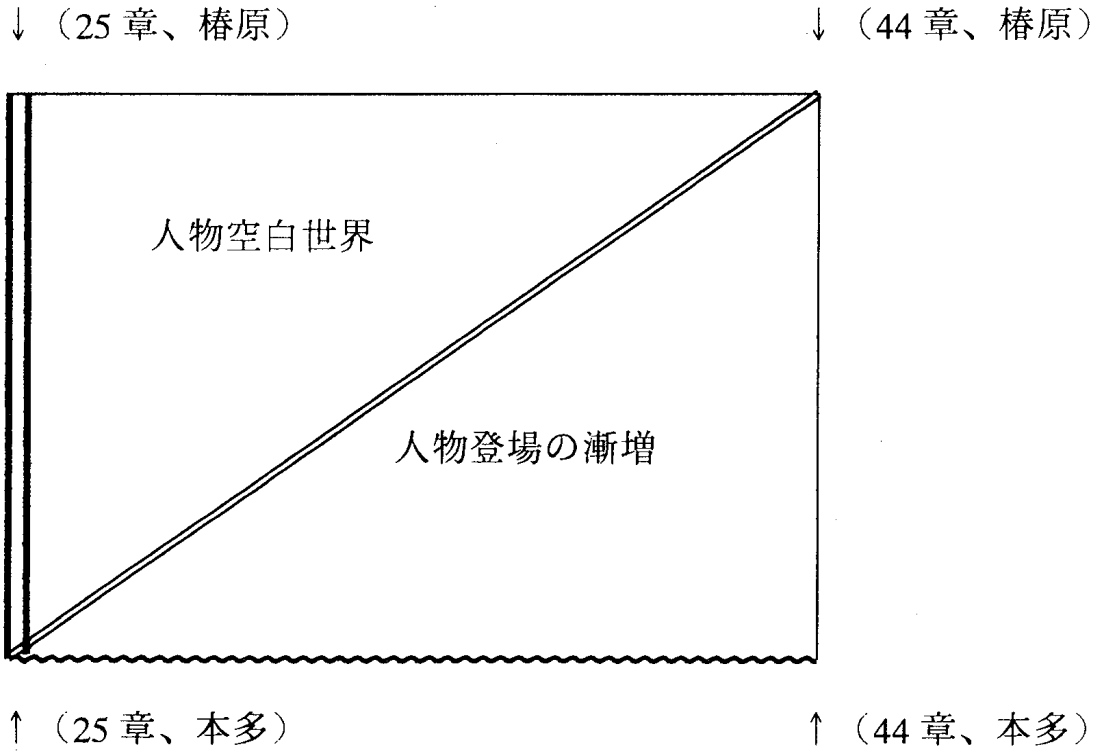

図 6　第二部のパターン

の要素ではない。作品はそれなしでも、滔々と流れている。

この19章は、本多の認識の理性的結論が記された章であった。

○第二部のパターン

図５から、25章以降を椿原の通時系列線で囲むと四角形が見えてくる。それを図６に書き改めた。

第二部のはじめの25章で本多は主要な登場人物をほとんど一度に観察し、作品に浮上させた。そして第二部の人物と、主調となる｛暁・快楽、暁・象徴｝鍵語群は44章のクライマックス（別荘喪失）にむけて徐々に膨らんで行っている。

図５によれば、その間作品は、勲、清顕、蓼科という夢幻のクラスターをともなって、通底音のような「豊饒の海鍵語」を奏でている。

まとめ

『暁の寺』の小説構造を、登場人物と鍵語によって分析した。

登場人物は、正規化をほどこし、クラスター分析をした時点で、｛本多繁邦、ジン・ジャン、久松慶子、本多梨枝、今西康、鬼頭槇子、椿原夫人、飯沼勲、松枝清顕、蓼科｝の10名を対象とした。

鍵語としては、｛豊饒の海鍵語、暁の寺鍵語、暁・快楽、暁・象徴｝の４つの鍵語群を使った。

これら人物と鍵語とをクラスター分析、及び地図化によって可視化し、『暁の寺』小説構造について、本論４章でいくつかの結論を得た。

（１）第一部と第二部の違いは明白にでた。第一部は本多の認識過程であり、第二部はそれと対比的な、現実世界の快楽を主調とした人間界である。

（２）本多は、この作品にいたって視点と化し、何者とも交流を持たなかった。これは本多の一人称小説であると言ってよい。それは前２巻での転生観察者としての本多の属性をより明確に継承していることを示す。

（３）『暁の寺』で本多は観察者であるままに、認識者へと変化していくのは、ベナレスでの体験によって、本多が一旦崩壊したからであろう。このベナレス

体験とは、本多の信仰告白であり、それが視点の本多への移動をもたらした。
（4）なぜ、第二部が、一般的な宗教における信仰告白とは対置的な快楽世界の探求となったのか。これはベナレス体験が、汚濁と清浄、清濁とけあった「世界」を持ったものであり、『豊饒の海』もその全世界を写さねばならぬ必然性によってである。
（5）作品全体の結構は、前2作に比して対称的である。構造枠を強固にもうけることによって、認識と快楽という二つの異なったものを、一つの作品としてまとめ上げた。

以上の諸点を、今回可視化したパターンとして読み取ることができた。